2021 親子で学ぶ平和学習資料

私の戦争体験 第43集

おじいさんやおばあさんが体験した
大切な大切なお話の数々

巻頭特集「まんがで伝える戦時下の子どもたち」 P02
「私の戦争体験アーカイブ」のご紹介 P04
学童疎開の日々 杉村 冨美惠 P05
私の戦争体験 藤田 澄子 P08
桜宮橋さん ありがとう 久保田 尚子 P11
引き揚げ時の記憶 西浦 徹朗 P14
陸軍航空工廠での大東亜戦争 赤松 ミカ P17
父から聞いたこと 荒木 芳子 P20

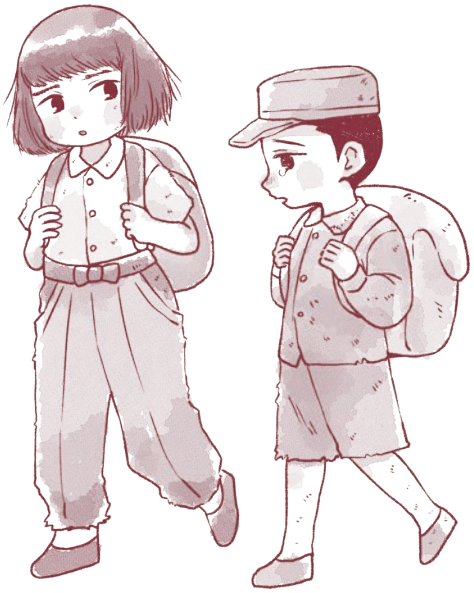
くらしに笑顔お届けします
大阪いずみ市民生活協同組合

学童疎開の日々

松原市　杉村冨美恵　87歳
（代筆　森喜代子）

昭和9年布施市（現東大阪市）稲田で両親・子ども8人、祖母、あわせて11人家族の末子として生まれました。

昭和15年4月小学校入学、16年に**国民学校**と名を改められ、12月8日**太平洋戦争**が始まり、それまで戦争は遠い地で日本はずっと勝ってきたと教えられてきましたが、長引くにつれ、沖縄、**硫黄島**など多数の人が犠牲になり、直接攻撃されて、昭和20年3月大阪も空襲がひどくなったので、その周辺の小学校も4月に福井県南条郡南越前町のお寺に、6年生は男女別々に、5年生以下は駅に近いお寺に**集団疎開**することになりました。親戚のある人は縁故疎開、小さいので行けない。北陸は結核が多いとか親と生き別れてしまうとか、いろいろとうわさがありました。



国民学校
1941年、それまでの小学校が国民学校に改められた。子どもは、個人の子どもではなく、お国の子どもとして教育され、戦争につながる教育が行われた。

太平洋戦争
1941年から1945年にアメリカ・イギリスなどの連合国と日本との間に行われた戦争。

硫黄島
小笠原諸島の南端近くに所在する、東西8km、南北4kmの島。1945年2月から3月にかけて「硫黄島の戦い」という激しい戦闘が繰り広げられた。

集団疎開
空襲や火災などの災禍の集中しやすい大都市の住民を地方に集団で分散移動させること。

初めの2、3日は遠足気分でしたが、家が恋しくなって女子は泣き出し、男子は遠い駅まで歩いて行き、連れ戻され、早朝から近くの神社に必勝祈願に行き、川で洗濯をし掃除をし、寺から遠い豆腐屋で水を入れたバケツに豆腐を入れ、重くて壊れないように持って帰るのは大変でした。女子はひと組（30人ほど）で地元の小学校の教室で勉強や歌（勝ちぬく僕ら小国民…）の練習など、村の子どもと遊んだりして楽しい時もありました。

食事は大豆の多いご飯、雑炊、すいとん、味噌汁。おやつは茹でた大豆にしょう油をたらしたもの、甘い物は全くない。食べ物が不足して空腹で、地域の方が塩味のおはぎをときどき持ってきてくれてうれしかったです。近くの山から杉の枯れ葉を背負ってきて沸かした**五右衛門風呂**に入れてくれたりと、村の人たちは親切に助けてくださり、今でもつながりがあります。

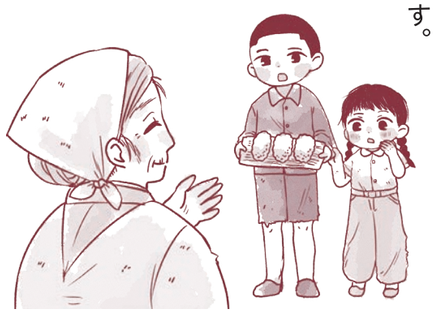
夜の**福井空襲**の時は遠い空が赤くなったが、疎開のおかげで直接怖いことはありませんでした。北陸でも夏は暑くて栄養不足で体重が23キログラム程にやせて、いきいきと遊ぶ気がしなくなりました。皮膚にできものがたくさんできたり、衣ジラミが出てきて消毒したりと辛い毎日でした。若い先生は女子30人ほどの親にされて、ご苦労であったと思います。たまに家族と面会があり、満員の夜行列車で姉が来てくれて、親や他の兄姉の手紙をもらって涙しながら何度も読みました。

五右衛門風呂
円筒形の木桶を鋳鉄製の底部にのせ、下から薪などでたいてお湯を沸かして入るお風呂。底が直接釜になっていて熱いため、底板を用いて入る。

福井空襲
1945年7月19日から翌日にかけ、B29による集中爆撃を受け、壊滅的な被害を受けた空襲。市街地の損壊率約85％、被災者85603人、被災世帯21992軒、死者1576人にのぼった。

そうして8月15日、戦争は終わったと聞き大喜びでしたが、列車が少なくて10月にやっと**帰阪**しました。学校は空襲で全焼しており、近くの小学校や会館に分散して授業が再開されました。平和になってもっと勉強したい、と言って戦死した次兄の分まで勉強せよ、と母は言っていました。

戦争はなくしたいけれど簡単なことではなく、人の野望や民族の想い、利益に左右されてしまうなど、どのようになれば平和が実現できるのか真剣に考えるリーダーが続いてほしいです。

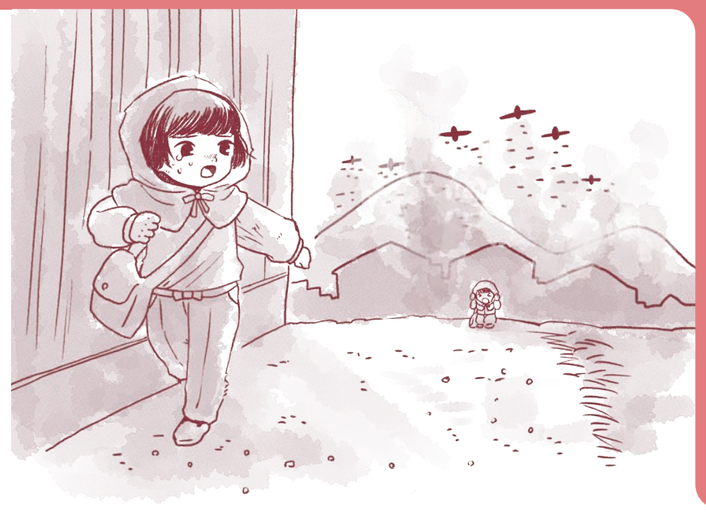


学童疎開　写真提供：ピースおおさか（大阪国際平和センター）

帰阪
大阪に帰ること。

私の戦争体験

高石市　藤田澄子　87歳



私は、香川県観音寺市にある西光寺という寺に生まれました。小学校は国民学校と改名されていました。3、4年生くらいまでは、学校の勉強も普通に受けていましたが、午後は毎日のように駅舎から道の両側に2列に並び、**英霊のお迎え**に行きました。だんだん戦況も悪くなり出したのか、登校して教科書を鞄から机に入れると、これも毎日のように**警戒警報**のサイレンが鳴り、すぐまた鞄につめて帰宅するようになりました。途中で**空襲警報**のサイレンが鳴るのと同時に、上空を**B29**が大編隊を組んで北上していたので、家の軒先伝いに走って家に帰るのですが、家までが遠かったので恐ろしい思いをしました。というのは、そのB29の**機銃掃射**の銃弾が、田んぼで作業をしていた人に当たったといううわさを聞いていたからです。それにわが家も機銃掃射に何度か遭い、大屋根瓦の両端のしゃちほこの尾の片方が欠けたり、後から本堂の天上裏から何発もの銃弾が発見されたり、また軒先に当たり火を吹いて火事になるかと恐ろしかったこともありました。夜は床に入るやいなや警報が鳴り出し、素早く枕元に畳んでおいた服を着て、**防空頭巾**をかぶり、**防空壕**へ走ることも度々ありました。

5年生の時に大阪の八幡屋国民学校から31人の生徒と先生が集団疎開に来ました。その子たちの父兄が何か月かに一度面会に来るのですが、来られない子の衣類やお菓子を預かって来ていたようです。少しのお菓子を周りの子が「おくれ、おくれ」とねだるので、みんなで分け合い、楽しんでいました。晴れた日曜日などは本堂の縁側で布団を干し、衣類ののみやしらみを取ったりしていました。親元を離れた子どもたちの寂しい気持ちを少しでも紛らわそうと、土曜日の夜は演芸会のような催しを行い、たいていは**軍歌**を何人か一緒に前に出て歌うのですが、私も一緒に、その時は楽しく「**月月火水木金金**」と歌いました。

翌年、6年生は卒業して大阪に帰り、空襲に遭い亡くなった子もいたと聞いています。

戦中戦後は食料難で、米も**配給制**で、しまいにはカンコロといって、唐芋を干して粉にしたものを配給され、母はそれを水で練って、蒸して饅頭にして食べさせてくれました。野菜の代わりに芋のつるを煮たり和えたりして食べたことも覚えています。砂糖もなく、**ズルチン**とかを使って

英霊のお迎え
「英霊」とは戦死者の霊を敬っていう言葉。英霊は故郷に帰ってくるため、出征兵士をお見送りするときと同じように駅へお迎えに行くこと。

警戒警報
敵機の空襲のおそれがある場合に出された警報。

空襲警報
敵軍航空機による空襲から避難を促すためにラジオやサイレンなどで知らせる警報。

B29
アメリカのボーイングが開発した大型戦略爆撃機。B29による日本本土空襲は、日本の継戦能力を喪失させる大きな要因となった。

機銃掃射
機関銃の銃口を動かし、敵をなぎ払うように射撃すること。

防空頭巾
戦時中、空襲などの際に飛来物から頭を守るためにかぶった綿入れの頭巾。

防空壕
空からくる敵の攻撃に対し、避難するために掘ってつくった穴やみぞ。

軍歌
軍隊の士気を盛んにし、また愛国心を育てるためにつくられた歌。

月月火水木金金
海軍が休日返上で猛訓練を行っていたことを表した言葉を元にして作られた軍歌。

配給制
数量が十分でない物資を家庭ごとにわりあてて配る制度。

ズルチン
人工甘味料の一種。中毒事故が多発し、肝機能障害や発がん性等の毒性が認められたため、1969年以降、食品への添加が全面禁止された。

いたと母から聞いています。また衣料品もなく、叔母の着なくなったレースの服を作り替えて着たり、シャツの胴のきれいなところでパンツを作ったりしました。洋裁も何も知らずとも工夫して作っていました。

小学生の頃、運動靴が欲しいのですが、組で1、2足しか配給がなく、くじを引いて当たった人がもらえる、そんな時代でした。疎開の子たちにはまかないの方が2人いて食事を作っていましたが、おかわりがないのでどれが多い少ないと、けんかになったりしていました。今の子どもたちはそれに比べれば何でもあって幸せです。

終戦になって、明日からは明るい電燈の元で生活ができ、夜はゆっくり休めると一番に思い、うれしかったことは忘れられません。

西光寺に集団疎開していた大阪市八幡屋国民学校の児童たち　写真提供：藤田さん

終戦
1945年8月15日、正午からのラジオ放送により、ポツダム宣言の受諾、日本の降伏が国民に公表され、太平洋戦争が終結した。

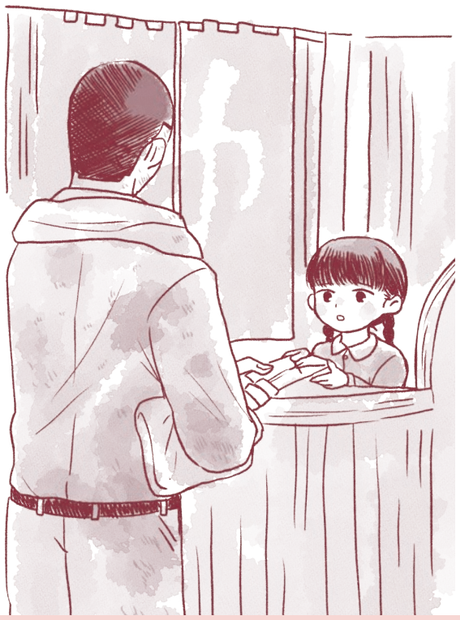
桜宮橋さん ありがとう

東大阪市　久保田尚子　84歳

昭和20年4月、私は小学2年生で、家族は父母と**旧制中学**1年の兄と生後1か月の妹と祖母80歳の6人家族でした。兄は毎日**学徒動員**で工場へ行き、父は大病をした後で**出征**はしていません。でも風呂屋をしていましたので、近くの宿舎から兵隊さんがたくさん入浴に来ました。

私は母と番台に座って兵隊さんを見ていると、ひとりの兵隊さんが手紙とお金を小さな私に握らせて、頼むから家に手紙を出してほしいと言われました。なぜなら軍の中では**検閲**があって、自由に自分の思いを書けないからだと母が教えてくれました。

また2年生になると、みんな石川県の方に学童疎開に行って、学校は休みになりました。私は母が空襲で親だけ死んで、子どもだけ残ったらかわいそうやから、死ぬ時はみんな一緒やと言って



桜宮橋
大阪市の大川に架けられた国道1号（曽根崎通）の橋。大阪市北区天満橋1丁目と都島区中野町1丁目を結び、銀色の橋であることから「銀橋」と呼ばれている。

旧制中学
1947年に学校教育法が施行される前の日本で、男子に対して中等教育（普通教育）を行っていた学校のひとつ。

学徒動員
国内の労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に動員されたこと。

出征
軍隊に加わって戦地に行くこと。

検閲
手紙などを事前に内容を検査し、不適当と認めるときは規制を加える行為。

疎開には行かせてくれなかったのです。家は大阪市北区の造幣局の大川が流れている東側にありましたので、毎日激しい空襲があり、**焼夷弾**が落ちて親子ともども死ぬ覚悟をして暮らしていたのでしょうか。田舎もなかったので、父は高齢の祖母と赤ん坊と子ども2人を抱えてよく大阪のど真ん中に住んでいたなぁ、と今思います。

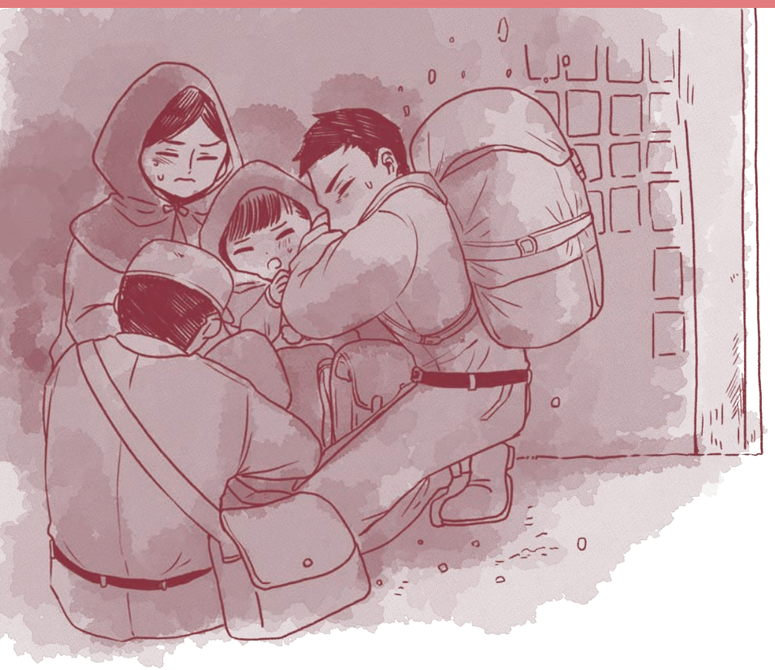
昭和20年6月7日に**大阪大空襲**があり、家族5人（兄は工場にいた）は近くの**桜宮橋**の橋の下に逃げていました。祖母は「80にもなってまだ命が惜しいのかと笑われる」と言って、なかなか逃げて来ません。桜宮橋の下にはたくさんの人が逃げて来ていました。私は背の高い大人に交じって、爆風が吹き込む橋の下で右往左往していました。親は赤ん坊と祖母を守るのに精いっぱいで、私のことはかまってくれません。堤防に建ち並んでいる家々が真っ赤に燃えていました。どのくらい経ったのかわかりませんが、ようやく空襲は終わりました。

今の太閤園のところが避難所になっていたので、そこで一夜を明かしました。兄は遠い工場から歩いて帰ってきました。お風呂屋の店も居宅も全部焼けていました。桜宮橋の上では、市電が爆撃を受けて、たくさんの死体が黒焦げであったと親が言っていました。母は家が焼けて何もないけれど、全員無事であったと喜んでいました。その後住む家がなかったので、親類の家をあちこち居候になりながら、大阪に戻ってきたのは私が小学4年生の時でした。

終戦直後の大阪　写真提供:ピースおおさか（大阪国際平和センター）

焼夷弾
敵の建造物や陣地を焼くことを目的とした砲弾や爆弾。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使用された。

大阪大空襲
1945年3月13日深夜から翌日未明にかけて最初の大阪空襲が行われ、その後、6月1日、6月7日、6月15日、6月26日、7月10日、7月24日、8月14日に空襲が行われた。これらの空襲で1万人以上の一般市民が死亡したと言われている。



今でも造幣局の桜の通り抜けに行った時は、あの桜宮橋の橋の下に行き、空襲の時はここに逃げていて命が助かったのやなぁと今でも懐かしく思い出します。この橋のおかげでたくさんの人が助かった、「桜宮橋さん、ありがとう」です。でもこのことを知っている人は少なく、子どもはみな集団**疎開**に行っていなかったし、私も84歳になっているので、この橋のことを書き残したいと思いました。

桜宮橋　写真提供：大阪市立図書館

疎開
攻撃目標となりやすい都市に住む学童、老人、女性などを分散させ、田舎に避難させること。

引き揚げ時の記憶

堺市　西浦徹朗　81歳

私は昭和15年3月11日生まれですので、終戦時は5歳と5か月でした。したがって**引き揚げ**時の記憶は自分の実際の記憶と両親からの話が混在したものです。戦前、私の家族と親類縁者は仕事の関係で今の北朝鮮に渡り、**豆満江**に近い阿吾地という所に住んでいました。

終戦間近いある日、軍部から「2、3日山間部へ避難するように」との命令があったので、身の回り品と数日分の食料を持って避難しました。ところがその直後ソ連軍が越境侵攻して来たため、家に戻ることもならず、着の身着のままで日本への引き揚げ避難が始まりました。鉄道便は、日本軍が民間人を置き去りにして早々と調達撤収したので利用できず、徒歩での避難となりました。昼間は一部の朝鮮人から石を投げられたり危害を受けますので、山間部で野宿して眠り、夜間の徒歩避難が続きました。

父は2千人もの避難民のリーダーに押し上げられて大変でした。避難民の中には妊婦の方もいて、出産時には取り上げまでしたとのことです。女性はソ連兵に見つかると凌辱される危険がありますので、全員坊主刈りにして男装していました。

父と叔父は、途中ソ連兵に捕まり、貨物車で**シベリア**送りにされる途中、汽車が一時停車したすきに**高粱**畑に逃げ込み、脱走を図りました。貨車の屋根に陣取ったソ連兵から機銃掃射を受けましたが、幸運にも無事に避難民の元へ戻れました。映画のシーンを見るような事件です。

避難民を誘導するため、ソ連兵が横を沿い歩きすることもありましたが、退屈しのぎに丸い弾倉つきの機銃で、歩きながら50メートル先の電信柱の**碍子**を軽々と撃ち飛ばしました。農民上がりの兵士なので数の勘定は両手指までが限界ですが、射撃の腕前は天才肌でした。

避難の途中、栄養失調と伝染病で大勢の避難民が亡くなりました。遺体をそのまま放置できないので、極寒の中、多少体力のある男性陣が遺体を**もっこ**担ぎにして山間部まで運び、埋めようとしても地面がカチンカチンに凍っていて穴が掘れないので、遺体を積み重ねにして上から土をパラパラとまいた状態で引き上げざるを得ませんでした。私も2回ほど死にかけたそうですが、かろうじて生き残りました。伯父と叔母、5人いた従妹はひとりを除き全滅でした。

引き揚げ
外地にいた日本人が、日本の本土（内地）に帰ること。当時、660万人以上といわれる日本人が海外に残されており、1949年末までに、624万人が帰還した。

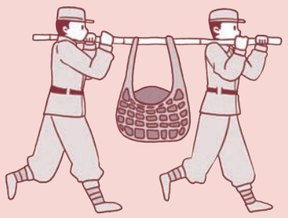
豆満江
中華人民共和国（中国）、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、ロシアの国境地帯を東へ流れて日本海に注ぐ、全長約500kmの国際河川。

シベリア
ロシア連邦の中部から東部にかけての地域。シベリアに連行された日本の軍人・軍属はマイナス30度を下回る厳しい環境で強制労働を強いられた。衛生環境や食料事情も悪く、飢えや病気によっておよそ6万人が命を落とした。

高粱
コーリャン。背の高いモロコシの一種。中国東北部、朝鮮北部の乾燥地帯で栽培されている。

碍子
電線を支柱などに絶縁固定する陶磁器（または合成樹脂）製の器具。

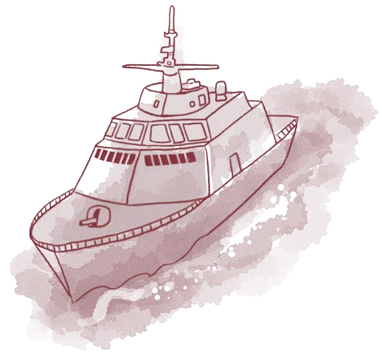
もっこ
藁蓆（わらむしろ）など平面の四隅に吊り綱を2本付けた形状の運搬用具。



避難民が北緯38度線に至った時、道路上に遮断機が下りていて、ソ連兵の命令で道路脇に一列に並ばされました。父が避難民全員に「ここまで何とかたどり着いたが、ここで全員銃殺されるかもしれない。覚悟してくれ」と言って回りました。しかし実際には点呼だけで遮断機が上がり、アメリカ兵に引き継がれました。

引き揚げを始めて徒歩で釜山にたどり着くまでに8か月を要しました。釜山からはアメリカ艦艇に乗せられて博多まで運ばれたのですが、日本の国土を目の前にしながら息絶えて水葬に付される方も何人かいました。さぞ無念だったことだろうと思います。私は早生まれなので昭和21年4月入学のはずが引き揚げのどさくさで入学準備が間に合わず、小学浪人1年を送るはめになりました。

戦争の悲惨さ、馬鹿らしさを身をもって体験した者として、この愚を二度と犯してはならぬ、犯させてはならぬと肝に銘じています。



北緯38度線
第二次世界大戦末期に朝鮮半島を横切る北緯38度線に引かれたアメリカ軍とソ連軍の分割占領ライン。

釜山
韓国の大きな港湾都市。

水葬
葬儀方法の一種。遺体を海や川、湖に葬ること。

陸軍航空工廠での大東亜戦争

静岡県榛原郡吉田町　赤松ミカ　97歳
（代筆　赤松知哉）

私が尋常小学校に入学した昭和6年は満州事変、高等女学校に入学した昭和12年は支那事変が始まりました。戦争は私が学校に入学すると始まるものという感覚でした。私の叔父は陸軍省から召集令状（赤紙）が届き、高崎歩兵第15連隊として満州事変へ参加していました。

大東亜戦争は高等女学校4年の昭和16年12月に始まりました。日の丸の旗を持って駅へ行き、出征する兵隊さんを見送ることもありました。当時は満20歳になった男子は徴兵検査が義務付けられており、甲乙種の合格者は2年間の軍隊生活が待っていました。

昭和17年3月に女学校を卒業した後、就職に備えて3か月間、職業安定所でタイプライターの指導を受けました。そして、群馬県太田市にある中島飛行機と東京都立川市にある陸軍航空工廠

尋常小学校
1886年小学校令により設置され、満6歳以上の児童に初等普通教育を施した義務制の小学校。期間は最初4年、1907年から6年。

満州事変
1931年日本の関東軍が南満州鉄道の線路を爆破した柳条湖事件をきっかけに、満州全土を占領した事件。

支那事変（日中戦争）
1937年～1945年に日本と中華民国の間で行われた日中戦争に対する当時の日本側による呼称のひとつ。

召集令状（赤紙）
国から兵士として軍隊に入るよう命令が書かれた紙のこと。用紙が赤いことから「赤紙」と呼ばれていた。

大東亜戦争
太平洋戦争の戦時中の呼称。日本とアメリカ合衆国などの連合国との間に行われた戦争。

で募集があることを知り、私は**陸軍航空工廠**を選びました。タイプライターの経験を買われ、昭和17年7月23日より陸軍航空工廠内の診療所で働くことになりました。軍医さんから指示された通りに患者の診断書を打つことが仕事でした。

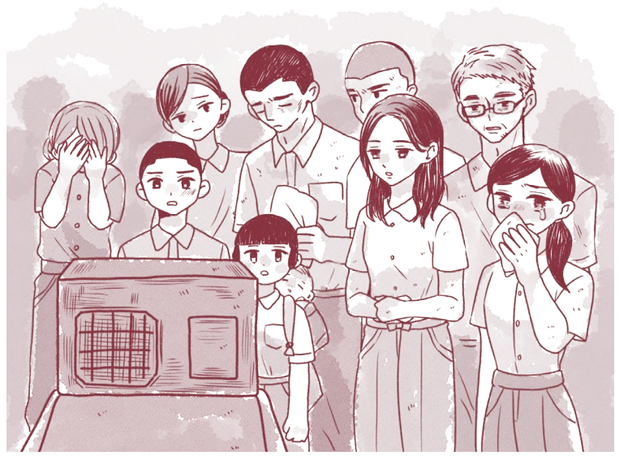
陸軍航空工廠とは陸軍唯一の航空機製造施設で、隣には立川飛行場がありました。戦争が激化するにつれ、毎日空襲警報が鳴るようになりました。はじめB29爆撃機はトンボくらいの大きさにしか見えませんでしたが、日本軍の抵抗がなくなると屋根のすぐ上空を飛び、敵機の飛行士もはっきり見えるようになりました。いつどこへ爆弾が落ちてくるかわからない恐怖の中、医療器具等を防空壕へ移し、診療を続けました。

昭和20年8月1日、敵機9機が3機ずつにわかれて陸軍航空工廠へ焼夷弾を投下してきました。建物のあちこちで火の手が上がり、辺り一面は瞬く間に火の海になりました。夏空と火の熱さをしのぐため防空頭巾を水で濡らし、工員総出で池の水をバケツリレーしながら消火しました。あの時の熱さと空襲の恐怖は今でも忘れられません。

8月6日、航空本部に書類を届けるよう命令され、ひとりで電車に乗りましたが、帰り道に駅で**空襲**に遭いました。幸いにも私は無事でしたが、翌日診療所には空襲で怪我をされた方が大勢やってきました。収容できなくなったので陸軍病院へ送ることにしました。皮膚が焼け焦げた臭いや血まみれの患者さんのことは思い出したくない思い出です。

8月15日、天皇陛下からお言葉があると聞き、全員が建物の外へ出て**玉音放送**を聞きました。終戦でした。天皇陛下のお言葉なので放送を聞いた時の心情は特に変わりませんでした。

97歳になり、当時の記憶はだいぶと薄れてきましたが、命からがら生き延びた私の体験です。戦争はとても悲惨です。二度と戦争が起こらない世の中になることを祈っています。



戦時中の働く女性　写真提供：大阪市立図書館

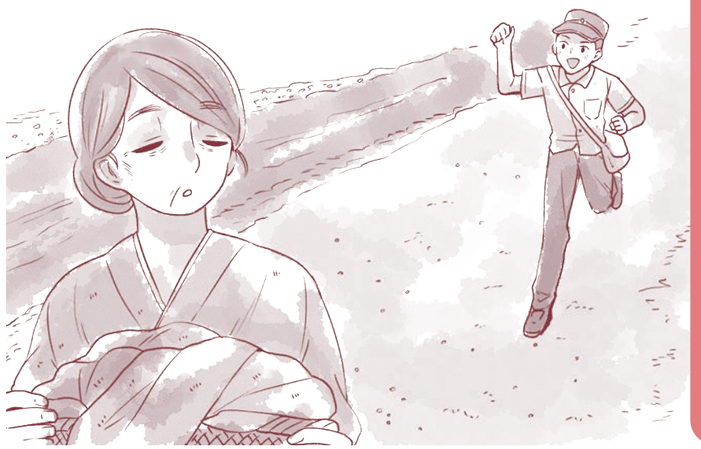
陸軍航空工廠
立川飛行場に隣接している、東京都立川市と昭島市にまたがって存在した大日本帝国陸軍の航空施設。

空襲
航空機から地上を爆撃したり、銃撃したりすること。

玉音放送
1945年8月15日正午から昭和天皇自らが太平洋戦争終結の決定を国民に伝えるために行ったラジオ放送。

父から聞いたこと

八尾市　荒木芳子　62歳



私の父は戦争中のことをいろいろ話してくれました。中でも**兵隊検査**の日のことを何度も話してくれました。

15歳になれば**志願兵**になれるということで、父は自らすすんで兵隊になろうと、**松阪市**まで兵隊検査を受けに行きました。15歳といっても、「数えで15歳」ということで、昭和6年8月31日生まれの父は、その時はまだ「満13歳」でした。父の兄は足が悪くて兵隊にはなれませんでした。そのために家族は村で肩身の狭い思いをしていたので、父が志願兵になることは父の家の名誉のためにも大切なことでした。父が検査を受け意気揚々と村に帰って来ると、近所のおばさんが川で洗濯をしていました。「どこに行ってきたの」とおばさんに尋ねられて、父は自信たっぷりに、「松阪まで兵隊検査に行って来た。ゼロ戦に乗って敵をいっぱいやっつけるんだ」と答えました。するとおばさんは、「戦争、終わったよ」と言ったのです。政府も軍部も、戦争が終わることを前もって知っていたのに、国民には知らせず、終戦の日の当日まで兵隊検査をしていたのです。

「戦争、終わったよ」と言ったおばさんの言葉のくだりになると、必ず父は声を出して笑いました。まだ幼かった私たち兄弟は、なぜ父が笑っているのかわかりませんでしたが、一緒に笑った方がよいような気がして、父と一緒に笑いました。そういう時、父は「『天皇陛下は**現人神**である。我々日本国民はその神の子であるから、天皇陛下の命によりアジアの人々のために**大東亜共栄圏**を作るべく鬼畜米英と戦うのだ。神の国は必ず勝つ。』と教えられて、みんなそれを信じていたんだ」とも言いました。

終戦の翌年、神であったはずの天皇はあっさり「**人間宣言**」をして人間になりました。戦争で傷つくことも死ぬこともなかったけれど、父は心が深く傷つき、その日以来がらりと変わった社会を40年あまり生き続けました。天皇のことを、父は「天ちゃん」と言っていました。

今、私は父がなぜあの時笑ったのかがわかります。学校に飾られた天皇陛下のお写真に毎日ごあいさつをし、少ないお米をおかゆにして竹筒に入れて弁当として持って行ったり、父の父（私の祖父）がゼロ戦を飛ばすための燃料にする松ヤニを山に採りに行っていたくらい困窮し、本土

兵隊検査
徴兵検査。一定の年齢に達した者に対して身体検査を行い、合格した者を徴兵対象の候補者とした。

志願兵
自らの意思で兵役につく者のこと。

松阪市
三重県のほぼ中央に位置する市。

ゼロ戦
零式艦上戦闘機。第二次世界大戦期における日本海軍の艦上戦闘機。

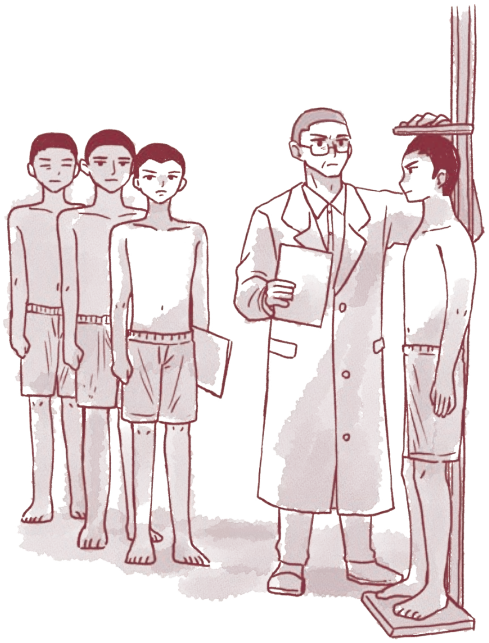
現人神
この世に人間の姿で現れた神のことで、当時の天皇は神であるとされていた。

大東亜共栄圏
太平洋戦争時代に日本が唱えた標語。アジアはひとつの共同体であり、欧米の支配から抜け出し、自立し、繁栄することができるとした。日本の中国および東南アジア全域に対する侵略を美化し、合理化するためのもの。

人間宣言
1946年1月1日に発布された昭和天皇の詔書。正式名称は「新年ニ當リ誓ヲ新ニシテ國運ヲ開カント欲ス國民ハ朕ト心ヲ一ニシテ此ノ大業ヲ成就センコトヲ庶幾フ」。この中で昭和天皇は自らの神性を否定した。

も空襲を受けるようになっていたのに、神の国日本は絶対に勝つ、負けるはずがない、と言われてそれを信じ、ゼロ戦に乗って敵艦に突っ込んで華々しく散ろうとしていた**軍事教育**をしっかり植え付けられて育った自分を思うと、愚かしくて情けなく悔しかったからです。

父は、自分のような思いをする子どもが二度と現れないように、私たちにつらい思い出を話してくれたのだと思います。私は、父の思いを後世に伝えるために、ペンを執りました。



軍事教育
心身をしっかり鍛え、より強い国をつくるための教育。厳しい団体訓練や木銃による軍事教練（女子はなぎなた訓練・救護訓練・看護訓練）などが行われた。